

よしつねせんぼんぎくら

義経千本桜

〔解説〕

竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

〔あらすじ〕

序 段 義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であった事、初音の鼓の事を詰問します。義経は申し開きをしますが、正妻卿の君が平家一門の時忠の娘であるということに対しては返答に窮するのです。卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切った事により全ては水の泡となり、義経は都を落ちていったのです。

二段目 義経は、あとを慕ってきた愛妾静御前を折良く来合わせた家臣佐藤忠信に託して、九州へと落ち延び

るため大物浦渡海屋銀平宅で船出を待ちます。やがて船出した一行に銀平に扮していた平知盛が襲いかかります。綿密な計画に従つての行動であつたはずが、ふと気づくと事態はいつの間にか壇ノ浦の合戦の再現になっていたのでした。全てが徒勞に終わつた事を悟つた知盛は、守り通してきた安徳帝を義経に託し、碇を背負つて海へと飛び込み、壮絶な最期を遂げます。

三段目Ⅱ維盛の妻子、若葉の内侍と若君六代君は、主馬小金吾の供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます（権の木の段）。

内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死してしまいますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思つたか小金吾の首を切つて持ち帰ります（小金吾討死の段）。

弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であつたため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮎屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。

母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入つた鮎桶を出しますが、その中に会つたのは権太が母親から騙し取つた金でした。そこへ権太が首の入つた鮎桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であつたと父に告げるのでした。そこへ現れた維盛が

梶原の置いていった羽織を裂くと、中から袈裟衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであったことが判るのです。

四段目 吉野の河連法眼の館に匿われている義経のもとへ国元に帰っていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思った義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕って忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、責めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのです（河連法眼館の段）。

五段目 頼朝と義経の仲を裂こうとした藤原朝方は教経に討たれ、忠信もまた教経を討って八島の戦いでの兄の敵を取ります。

椎の木の段

集むる折からに

若き男の草臥れ足、これも旅立ち風呂敷包み、背負ふてぶら／＼茶店を見付け、

「どりや休んで一服」

と、包みをどつかり床几しょうぎに下ろし、

「ヤ御免なりませ、火を一つ」

と、煙草吸ひ付け、

「ア、こりや皆様方、開帳参りでござりますか。わ

こ様は道草か。わしらが在所の子供と違ひ、テモマ

御綺麗な生まれ付きや」

と、誉めても話しかけても、心置く身はそこ／＼に、詞数なく拾ひゐる。暫く休んでかの男、

「ア、コレ／＼、その落ちた木の実こは虫入りで、見

かけがよふても皆ほがら。アレ、木にあるをお取りなされ」

と、言ふに金吾は、

「こな男何を言ふ。二丈余りの高木、駆け上るけづめは持たぬ」

「サア、それを心安ふ取り様がござります」

「ソリヤ又どふして」

「さらば鍛錬お目にかけふ」

と、小石拾ふて打つ礫、枝に当つてばら／＼。

若君悦び悩みも忘れ、

「小金吾ひら拾へ」

の御機嫌に、内侍も嬉しく、

「オ、よい事してもらやつた、過分々々」
と一礼も、冥加に余ると知らざりし、旅の男は自慢

顔、

「何と手の内御覧じたか。まそつと打つて進ぜたいが、遠道かゝへお伽申してもゐられず。我等は参る」と包を背負ひ、

「御縁あらば重ねて」

と、言うてその場を行き過ぎる。小金吾木の実を拾ひしまひ、

「サアこれで堪忍なされ、てさて、今の男は機転者」

と、見やる床几の風呂敷包み、同じ色でもどこやらが違ふた様なと走り寄り、内改むれば覚えなきしかもこれは張皮籠はりかわち、こちらは衣類ふじりうりの藤行李、

「さては木の実に気を奪はせ、取替へ失せたか、

たゞしは籠相か。何にもせよ追駆けて取り返さん」

と駆け出す所へ向ふより、あたふた戻る以前の男、

「ア、そそ籠相致した。御免々々」

と、言ひつゝ包み差し出だし、

「日暮れも近し心は急く。同じ色の風呂敷故、軽いに気も付かず、取り違へた籠相、道にてふつと心付き、取つて返してお詫び言。真平く御免下され」

と、顔に似合はぬ手摺り体貌。小金吾は胸落ち付き、
「籠相とあれば言ひ分もをりない。が万一紛失ふんじつの物
あると、赦さぬが合点か」

「何がさて、相違あらば台座の別れ、御存分になされませ」

「ムウその一言なら疑ふに及ばねども、中改めて受け取らん」

と包を開き、改め見れば相違もなし、

「げに籠相に極まつた、申し分なし。その方の荷物も持つてお行きやれ」

と、床几に残る風呂敷包み、渡せば受け取り不思議

顔、

「この中ぐくりの解けたは」

「イヤ、それは最前変はつた様には思へども、もしやとちよつと見たばかり」

と、言ふ間に開く張皮籠、引きちらけて袷の袖、浴衣の間をあひ探し見て、恟り仰天こり箇うち振ひ、

「こりやどぶぢや、コリヤないはくくく」

ときよろく目玉、

「何がない、何見へぬ」

と、傍も気の毒目を配れば、兼ねて工のいがみの男、腕まくりして、

「コレ前髪殿、この皮籠の中に、人に頼まれて高野へ上る祠堂金、廿両入れておいた。コリやくすねたな。サア出したくく、出しやいの」

と、取つても付かぬ難題に、小金吾むつと反り打ち

かけ、

「ヤこいつ下郎め、武士に向つて何がなんと、今一言言つて見よ」

と、吃相きつてう変はれどびくともせず、

「ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、盗人ただけしいと、その高ゆすり喰はぬくはいい。赤鯛ひねを撚りかけ、脅してこの場を抜けるのかい。ほろうまいそんな事、春永になされく。僅か廿両で首綱のかゝらぬ内、四の五の言はずと出したく、出しやいの」

と、もがりがみのねだり者、

「モウ堪忍が」

と抜きかけしが、お二方の姿を見て、じつと堪へて胸撫で下ろし、

「ハ、ハ、ハ、コレサ若い人、そりやそのものの覚へ違ひ。見らるゝ通り、足弱をお供したれば、たとへ

何万両落ち散つてあつても、目を掛ける所存はなし。
とくとそつちを吟味召され」

「ア、コレその足弱連れたが、盗みする付目じやはい。よもやと思はせしてやるが、当世の流行物、何

はやり

万両はゐらぬ、たつた廿両」

「スリヤどふしても身が盗んだとな」

「ハテ知れたこつちやい」

「シテ、その盗んだ証拠は」

「コゝゝ、コレ、この皮籠の中紐なぞ解いた。言いやいノオ。あり様の荷物に紛失があると、許さぬと言ふたでないか。サ理詰ぢやはいの。サア出しやいの／＼、エ、出しやがれ」

と、せり詰められて小金吾も、

「もふこれまで」

と抜き放す。内侍はあはて抱き止め、

「尤ぢや／＼、道理ぢやはいなふ。短気な事をしやつては、わしもこの子も共に難儀。無念にあらふと堪忍して、あの者の言ふ様に、了簡付けてやつても。足弱連れたを災難と思ひ、胸を鎮めてたものの」
と、涙にくれて宣ふにぞ。血気にはやる小金吾も見るに忍びず、

「ハア世が代でござらふなら、腕も臍もずた／＼に試しても飽き足らぬ奴なれども、何を言ふても茅つばなの穂にも怖ぢる身の上。御意の通りに致しましよ。エ、口惜しふござりまする」

と、こなたは大事の二方を、お供の身なれば無念を堪へ、奥歯噛む程付け上り、

「廿両といふ金暖まつて置いて、その面何ぢやい。
オ、怖わ／＼、オ、怖やのハゝゝゝゝ。コゝゝこの赤鯛で切るか、この目で威すかい。前髪を一筋づ

つ抜くぞよ。但しもふ金はふけらしたか。連れの
女郎めろから詮索」

引添ふ小金吾も、無念を堪へ上市の、宿しゆくある方へ
と急ぎ行く。

と、弱みへかゝるを首筋掴んで引き戻し、用意の路
銀言ふ程出して睨み付け、

「大切なお方をお供した故、銜かたり取らるゝ甘両。持
つて失せい」

と打ち付くれば、銜りの習ひ金見ると、目に仏なく
手ばしかく、拾ひ集めて耳読み揃へ、

「テモ恐しいこの金を、那智若衆めにすつての事、
ひぢり取らりよと致した」

とへらず口、

「そのおとがいを」

と、立ち寄る金吾を内侍は押さへ、

「事ない内」

と若君引き連れ、立ち出で給へば是非もなく、後に

小金吾討死の段

諸共立ち帰る

せきようい

夕陽西へ入る折から、主馬の小金吾武里は上市村にて、朝方が追手の人数に取られ数ヶ所の傷を負ひながら内侍若君御供申しひと先づ都へ立ち帰るを、後に続いて数百人、遁さぬやらぬと追つかけたり。手傷は負へども気は鉄石の武里が、死に物狂ひと思ひの刃、こゝに三人かしこに七人、ばらりとなぎ倒し、その身は秋の花紅葉敵は木の葉のその後へ、追手の大将猪熊大之進、遅ればせに駆け来たり

「ヤア死に損ひめいづくへ行く。先頃嵯峨の奥にて取り逃がし、主人朝方の御機嫌以ての外。すぐ／＼館へ帰られず、庵坊主めに白状させ、付け廻したる

この街道。サア、維盛の御台若君を渡し、腹かつさばけ」

と呼ばはったり。手負ひは流るゝ血汐をぐつと一飲

み息を継ぎ

「主馬の判官が倅小金吾武里、息ある中はいつかないかな」

「ヲ、その一言が絶命」

と、踊り上がって討つ太刀を、てうど請け止めはつしと跳ね、ひらりと見せてはくるりとはづし、手練を尽くせどさすがは手負ひ。内侍若君あぶ／＼ひや／＼、小石を拾ひ砂打ち付け、及び腰なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が眼に入つて目あては暗闇、透間に切り込むだんびらに、眉間を割られて頭転倒、乗つかゝるを下よりも突く、銚はあばら骨、金吾ものつけに反り返る。あなたが起きれば石礫、猪

熊切られ小金吾も、ともに深手の四苦八苦修羅の

衢ちまたぞ危ふけれ。忠義てんせいの天成小金吾が、難なく相手

を取つて押さへ、ぐつと突つ込む止とどめの刀

「サア仕負ほせし嬉しや」

と、思ふ心のたるみにや、『うん』とその身も倒れ
伏す。六代君は取り縋り

「死んでくれな小金吾。そちが死ぬるととゞ様に逢
ふ事がならぬは」

と、泣き入り給へば内侍はせき上げ

「アレ聞いてたも子心でも、そなた一人を力にする。

『維盛様に逢ふまでは死ぬまいぞ／＼』と、なぜ思

ふてはたらぬ。御一門残らず亡び、広い世界を敵

に持ち、いつまで永らへ居られふぞ。ともに殺して

たもの」

と嘆き給へば、『ことはり』と、手負ひはいとゞ涙

にくれ

「先君小松の重盛様は日本の聖人、若君様はその孫
君。諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますまい。

末頼みに思し召して、必ず短気をお出しなされな。

あれあれ、向ふへ提灯ひかげの灯影、又も追手の来たるも

知れず。若君伴ひ、この場を早く／＼」

「イヤ／＼深手のそなたを見捨て置いて、いづくを
当てに行くものぞ。死なば共に」

と座し給へば

「チエ、ふがひない、六代様は大事にないか。この

手で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなけ

れば直すくに切腹」

「ア、コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら、

成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」

「お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」

「必ず待つて居るぞや」

と、云ふ間に近付く提灯の、灯影に恐れ是非なくも、
若君連れて落ち給ふ。御心根ぞいたはしき。手負ひ
は御後見送り／＼

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借つても、
何のこの手で生きられませふ。内侍様、六代様、こ
れがこの世のお別れでござります」

と、思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、朝あした
の露と消へにける

河連法眼館の段（中）

鶯の声なかりせば、雪消えぬ山里いかで春を知らまし。春は来ながら春ならぬ、九郎判官義経を御慰めの琴三味や、河連法眼が奥座敷、音締めも世上忍び駒。琴柱に立つる雁金も、春を見捨てぬ志、げに頼もしきもてなしなり。

かかる所へ取り次ぎの侍まかり出で、

「佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行方を尋ね、御出でなり」と

案内に連れて入り来たる四郎兵衛忠信、御座の間のこなたに出で、たえて久しき主君の顔、見るも無念のあら涙、さし俯うつむいて詞なし。

大将御機嫌斜めならず、

「汝に別れここかしこ、鎌倉殿の御詮議強く、身

の置き所なかりしに、東光坊の弟子河連法眼に匿はれ、心ならざる春を迎へ、暫くの命を継ぐ。わが姓名を譲りしその方、命全くある事、わが運のまだ尽きざる所。ホヽオ、頼もしし悦ばし。その砌みぎり預けたる静はいかがなりしぞ」

と御尋ねありければ、忠信いぶかしげに承り、

「コハ存じがけなき御仰せ。八島の平一時に亡び、天下一統の凱歌を上げ給ふ。折から告げ来る母が病氣、聞こし召し及ばれ御暇給はつて、本国出羽へ帰りしは、去年三月。程なく別れし母が中陰、忌中に合戦の疵口おこづき、破傷風という病となり、すでに命も危き半ば、御兄弟の御仲さけ、堀川の御所没落と承る口惜しさ。胸を煎る程重る病氣、無念さ余つて腹切らんとは存ぜしかど、せめては主君おんの御顔かんばせ、今一度拝し奉らんと、念願叶ひて本復ほんぶく遂げ、

初立ちの長旅、忍びの道中ういだ恙なくこの館に御入り
と承り、只今参つた忠信に、姓名を給はりし、イヤ
静御前を預けしごじょうななど御諚の趣き、かつ以て身に
覚え候はず」

と言はせもあへず氣早の大将、

「ヤア、とぼけな忠信。堀川の館を立ち退きし時、
折よく汝国より帰り、静が難儀を救ひし故、わが着
長を汝に与へ、九郎義経という姓名を譲り、静を預
け別れしその方。世になきわれを見限つて、静を鎌
倉へ渡せしな。義経が在処ありかを捜しに來たか。只今国
より帰りしとは、まぎ／＼しき偽り表裏ひょうり。漂泊して
もうつけぬ義経、謀らんとは推参なり。不忠二心の
人外め、アレ引括つて面縛めんばくさせよ。亀井、駿河」
と腹立ちの聲に駆け来る二人の勇士、裾ばせ折つて
忠信が弓手馬手に反り打ちかけ、

「委細あれにて皆聞いた。サア、腕廻せ四郎忠信」
「静御前の御行方、明白に白状せよ。ただし踏付け
縄掛けうか」

「拷問して言はせうか」

「サア、どうぢや／＼」

とせりかけられて、せん刀、差し添え共に投げ出だ
し、

「兩人待つた、僞忽そこつすな」

「ヤア、待てとは、ただし言ひ訳あるか。サア、聞
こう」

「サア、なんと」

「なんと／＼」

と難儀の最中、

「静御前の御供申し、四郎兵衛忠信殿、御出でなり」
と奏者が声に、人々仰天。

「ナニ、忠信がまた来たとは、合点行かず」

と聞きもあへず、以前の忠信突つ立ち上がり、

「よう、わが名を銜るは何でも曲者、引括つて大将
めんばれへの面晴せん」

と駆け行くを、

「ヤア、ならぬ」。詮議の済むまで動かさぬ」

と亀井が向うを支えたり。

「ヤア、さなせそ六郎。忠信これにある上に、また

忠信が静を同道。ム、何にもせよ子細ぞあらん。片

時も早くこれへ通せ」

「あつ」

と亀井が次の間へ。

わが身危ぶむ忠信は、黙して様子を窺へば。

別れ程経し君が顔、見たさ逢ひたさとかはと、河

連が奥の亭、歩み来る間もとけしなく、

「ノウ、わが君か、懐かしや」

と人目厭はず縫すがり付き、恋しゆかしの溜ためだめ々を涙の色に知らせけり。

「オ、女心に歎くは理り。別れし時言ひ聞かせし如く、人の情けに預かる義経、輪廻きたなき振舞ひならねば、つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや、いづくにあり」

と尋ね給へば、

「たつた今、次の間まで連れ立つて参りしが、こゝへはまだか」

と見廻し、

「ヲ、それ、テモ早うこゝへ来てぢや。一

緒に御目に掛かるものを、ちつとの間に先へ抜けがけ。まだ戦場かと思ふてか。まんがちな人ではある」

と恨み口なる詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信、

「わが君もその如く覚えなき御尋ね。拙者めは今の先、出羽の国より戻りがけ。去年御暇おいとま申ししてから、御目に掛かるは只今初めて」

「エ、あの人のぢやら／＼と、てんがうな事ばかり」

「ア、イヤ、てんがうでなし、大真実」

「アレまた、真顔で欺ますのか」

と何気も媚めく詞の内、立ち戻る亀井六郎、なま

「静様同道の忠信、引立て来たらんと存ぜしところ、次の間にもありあはさず、玄関長屋所々方々尋ねても相知れず候」さうろう

と申すに心迷はせ給ひ、

「コレ静、こゝに居おるはその方を預けたる忠信ならず。只今国より帰りしと物語りする内、忠信、静を同道との案内。二人ある内にも見えざるは不審者。」

面体似たる贗者ならずや。静、心が付かざるか」

と仰せの内に、忠信をつれづれと打ち眺め、

「ハア、どうやらそう仰やれば、小袖も形も違ふて

ある。お待ち遊ばせや。それが、ム、そうぢや、思

ひ当る事がある。君が形見と別れし時、給はりし初

音の鼓。御覧遊ばせこの様に、肌身も離さず手に触

れて、忠信の介抱受け、八幡山崎小倉やはたの里、所々に

身を忍びゐたりしに、折々の留守の内、君恋しさの

この鼓、打つて慰む度々に、忠信帰らぬ事もなく、

その音を感じ堪ゆる事、モほんに酒の過ぎた人同然。さく

打ちやめば、きよろりと何気ない顔付きは、マ、よ

く／＼鼓が好きそうなど、初手しよては思ひ、二度三度、

四度目にはテモ変つた事、また五度目は不思議立ち、

六度目には怖げ立ち、それよりは打たざりしが、君

はこゝにと聞きつけて、心せく道忠信にはぐれた時、

鼓の事を思ひ出し。打てば不思議や目の前に、来る
ともなく見えたるは女心の迷ひ目かと思ふて連れ
立ち来たりしに、またこの仕儀はどうぞいの」

と申し上ぐれば、義経公、

「ムウ、鼓を打てば帰り来るとは。ム、それぞ良き
詮議の近道。静、そちに言ひ付ける。その鼓を持つ
て同道した忠信を詮議せよ。あやしい事あらばこの
刀で」

と投げ出だし、

「わが手で打たれぬ鼓の妙音、それを肴に一献酌ま
ん。早や／＼鼓打て／＼」

と言ひ捨て奥に入り給へば、亀井、駿河も忠信に引
添ひ（てこそ入りにけれ。）

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。